2018 年３月 11 日（日）「信仰としるし」

マタイ 16:1-12（その１）

1 パリサイ人やサドカイ人たちがみそばに寄って来て、イエスをためそうとして、天からのしるしを見せてくださいと頼んだ。 2 しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる』と言うし、 3 朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ』と言う。そんなによく、空模様の見分け方を知っていながら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。 4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」そう言って、イエスは彼らを残して去って行かれた。

5 弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れた。 6 イエスは彼らに言われた。「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」 7 すると、彼らは、「これは私たちがパンを持って来なかったからだ」と言って、議論を始めた。 8 イエスはそれに気づいて言われた。「あなたがた、信仰の薄い人たち。パンがないからだなどと、なぜ論じ合っているのですか。 9 まだわからないのですか、覚えていないのですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。 10 また、七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。 11 わたしの言ったのは、パンのことなどではないことが、どうしてあなたがたには、わからないのですか。ただ、パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に気をつけることです。」 12 彼らはようやく、イエスが気をつけよと言われたのは、パン種のことではなくて、パリサイ人やサドカイ人たちの教えのことであることを悟った。

【序論】

聖書論という分野では「聖書は誤りなき神の言葉である」という表現を巡る議論が展開されてきました。「誤りがない」という部分をどう理解するかは、読者の聖書観にかかっていると言えるでしょう。一字一句誤りがないという意味か、全体として誤りがないという意味か、部分的に誤りがないという意味か。捉え方には幅があります。中には科学的に検証した上で誤りがなければ聖書は正しいと言い得ると考える人もいるでしょう。しかし、その場合、誇張表現や象徴的数字、当時まだ分かっていなかった天文学的事実など、書かれた時代と現代的科学認識との間の違いを見落としてしまうかも知れません。私たちの理解では、信仰によって聖書は無謬の神の言葉と告白されます。そして、信仰をもって聖書を読み、信仰をもってナザレのイエスを見ていく時に、読者は神からの「しるし」を受け取るのです。

【本論】

今日から 16 章に入ります。マタイ福音書の分岐点とも言える章であり、ここから主の受難の足音が静かに聞こえ始めます。文脈では、主イエス一行が異邦人の地からガリラヤに戻ったのですが、待ち受けていた反対者の妨げによって、再びその地にいられない状況になるという場面です。

本論１．しるしを求めることの本質

パリサイ人やサドカイ人たちがみそばに寄って来て、イエスをためそうとして、天からのしるしを見せてくださいと頼んだ。（16:1）

パリサイ人は何度も出てきますが、ここではサドカイ人が一緒になって登場します。マタイは他の福音書記者に較べてサドカイ人への言及が多く、全部で 14 回も出てきます（マルコ：１回、ルカ：１回、使徒：５回）。本来、この二つの宗派は考え方が大きく違うため、袂を分かっていたのです。パリサイ人はこれまでに学んできた通り、モーセ律法を如何に厳格に守るかを第一の使命とし、その律法解釈（伝承）を徹底して守る立場に立っていました。一方、サドカイ人というのは基本的に神殿に仕える祭司貴族で、富裕層のみを味方に付け、ユダヤ教最高議会の議員の多くがこのグループに属していました。聖書的な立場で言うと、彼らの先祖がモーセ五書を編纂し、正典としたので、その伝統に則って五書以外は認めていませんでした。伝承も否定する立場です。彼らは霊の実在も死者の復活も信ぜず、神の聖定や摂理以上に人間の自由意志を重視しました。メシヤの到来を信じてはいるものの、ローマ帝国とはトラブルになりたくないので、政治的な事柄には関与しないという立場に立っていました。使徒 23 章には「死者の復活」を巡ってパリサイ人とサドカイ人が分裂したという記述があるように（23:6-10）、両者は基本的に全く相容れない考え方をしていたのです。ところが、ここではイエスに敵対するという意味において一致をしている。

彼らはイエスに「天からのしるしを見せよ」という要求を突きつけているのですが、これと同じ問いかけは既に 12:38 に出てきました。そこでも主は同じ答え（三日三晩大魚の腹の中にいたヨナの経験＝しるし）をもって彼らの要求を拒否しておられます。同じことが繰り返されるのは何を意味しているのでしょうか。それは、彼らはイエスがしるしを見せないことを知った上で、別の目的でこのような問いを発しているということです。つまり、イエスにはメシヤであることを証明するしるしを示せないと言って、群衆の信用を失わせるのが目的でしょう。ただ、読者としますと、主イエスがこれまでに

数々の「神の国のしるし」を行なってこられたことは歴然なのです。

目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツァラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。

(11:5)

しかし、敵対者たちはこのような主の御業を見聞きしながら、それを「神の国のしるし」「メシヤのしるし」とは認めなかった。では、彼らが求めているものとは何か。パリサイ人とサドカイ人の共通認識がモーセ五書であるならば、彼らにとってのしるしとは、燃える柴の中から聞こえたモーセに対する語りかけや（出 3:2-6)、天からマナを降らせる奇跡（出 16:13-30）のようなもののことを言うのでしょう。

主イエスがそのような奇跡を行ない得なかったかというと、そうではなかった。主イエスがヨルダン川で受洗をされた時に聞こえた天来の声はモーセへの声を思い起こさせますし（3:17)、5000 人の給食／4000 人の給食はマナによる養いを想起させます。

しかし、主は彼らに決してしるしを与えることをなさらない。なぜか。それは、彼らはたとえそれを見ても信じないからです。しるしを見たら信じると主張する人々は、はじめから信仰が欠如しているのです。これは冒頭で申し上げた、聖書にもし誤りがなければ信じると主張する人と似ています。信仰がなければ、主イエスを理解することは決してできません。

本論２．時のしるし

しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる』と言うし、朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ』と言う。そんなによく、空模様の見分け方を知っていながら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。（12:2-3)

彼らの悪意を見抜いた主イエスは、反論をされます。「朝焼けは雨、夕焼けは晴れ」という諺が日本にもありますが、パレスチナにおいても同様の格言があったようです。パレスチナという地域は西側に地中海が広がっています。夕方に海の方を見て、夕焼けであると翌日は晴れであることが分かる。反対に、東のアラビア砂漠の方面に朝焼けが広がっていると、決まってその日の天候が荒れる。「夜の赤い空は羊飼いの喜び」という格言があったようで、これは古代人の間でも常識となっていた気象予報術でした。

主はなぜこんな格言を引用されたか。それは、「空（天)」という言葉に引っかけて、神の臨在される「天のしるし」を見極められない彼らの霊的鈍さを皮肉交じりに指摘するためです。彼らは天体のことはしっかり分かっている。ところが、霊的な意味におけ

る「天」のことは何も分からない。主イエスが来ておられるということは、神の臨在がすぐそこにあるということ。「時のしるし」とは、旧約聖書に照らして捉えるならば、「審きの日」「贖いの日」と関係していることが分かります(イザヤ 10:3、エレミヤ 10:15、11:13、ホセア 9:7)。しかし、彼らはイエスご自身を見ても、その言葉を聞いても、御業を見ても、「主の日」のことが分からないのです。

そういえば、私たちが礼拝をささげる日曜日のことを「主の日」と呼びます。この表現にはドキッとさせられる何かがありませんか。何か「終わりの日」を思わせる表現であり、私自身は最終的な審き／贖いの日とつながりを持つ日として、日曜日を大切にしなくてはならないと理解しています。主の日の礼拝は、私たち自身の終末（死ぬ日）ともつながっているはずです。神学校時代、ある先生がこう言っておられたのを覚えています。「これは神学的な根拠があるということではなく、私が思っているだけです。再臨は日曜日、礼拝がささげられている時に来ると思います。」

復活された主イエスが日曜日を選んで弟子たちの前に現れなさったという一つ一つの出来事を見ていく時、この先生が言われたことにも根拠がないとは思えません。いずれにせよ、私たちが礼拝の生活をしていることと、最終的な贖いとは、間違いなく関係しているでしょう。私たちが自分自身の終末、世界的な終末を念頭に置いて生きているかどうかということが、「時のしるし」を見極めているかどうかの要なのです。

本論３．ヨナのしるし

悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」そう言って、イエスは彼らを残して去って行かれた。（12:4）

「**悪い、姦淫の時代**」という表現も以前に出てきました（12:39）。意味を捉えていきますと、霊的な夫としての神に対して霊的姦淫（偶像礼拝）を犯し、神の義を破っている時代ということになります。主イエスは、しるしを求める彼らの姿勢を「霊的姦淫」つまり「偶像礼拝」と捉えておられるのです。これほどまでに深刻な霊的現状に対する主の苛立ちが伝わってこないでしょうか。

私たちは「偶像礼拝」と言う時に、目に見える像を拝む姿を想像しやすいでしょう。そのことも含めて、偶像礼拝とは真の神をさしおいて、自分の能力、業績、金銭、力などに頼り、それを神格化し、その前に跪くこと全般を意味します。しるしを求めるとは、イエスが誰であるかを勝手に決めようとする行為であり、信仰から出ている態度ではありません。主イエスが審き主であられるならば、その方を裁こうとする者はもちろん審かれるでしょう。これは聖書に対する私たちの姿勢とも関わってくる。聖書に書かれて

いる内容がすべて正しければ信じるという態度とも繋がっているのです。読者が聖書の上に立ち、御言葉を裁くような読み方をしている時、その人は危険な状態にあります。

ある先輩が大学の科学部の壁にこんなポスターが貼られているのを見たそうです。「確かに神が天地を創造した。では、神を創造したのは誰だ？」この文言を見て、その先輩の心に憤りが湧いてきたと言います。初めから聖書に対する対決姿勢を前面に出して読んでいくならば、その人が真理を悟ることはありません。

１節に出てくる「試す」（πειράζω）という言葉は、実は４章における「荒野の誘惑」の箇所にも登場します。悪魔は主イエスに、石をパンに変えてみよ、神殿から飛び降りてみよ、私を拝んでみよ、という三つの要求を突きつけました（4:3-11）。主イエスを試みるという悪しき業が人間の内にも現れてくる。それが、パリサイ人、サドカイ人がやっていることの本質だったのです。

【展開】

今日は 12 節までを朗読していただきましたが、実際には４節までを扱いました。次回扱うことになる５節以下は、「パン種」を巡る主イエスと弟子たちの問答なのですが、先取りしますと、一見今日の箇所とあまり関係がないように見えるこの内容は、実は根っこのところで繋がっているのです。主イエスの御業を間近に見てきた弟子たちが、主がすぐそこにおられるというのに、パンが足りないと言って騒ぎ始める。これは、主イエスを真の養い主と認めていない、信じていない彼らの心の現れに他なりません。主はそのことを厳しく追求される。パリサイ人、サドカイ人の心と共通したものを察知されたからです。

【結論】

私たちは自分の聖書の読み方、主イエスに向かう姿勢をもう一度問うてみる必要があるでしょう。畏敬をもって一つ一つの言葉を読んでいるか。聖書を評価してやろうといった態度が自分の内にないか。信仰が先立っているか。救いを求めているか。

信仰をもって聖書を読む人には結果として「しるし」が与えられます。反対に「しるし」を求めて読む人には、与えられません。私たちはどちらを選択するか。何よりも大切なのは、神の御前にへりくだることであります。

【祈り】

　終わりの日の王であられる主よ。私たちは主イエスの再臨を待ち望んでいます。主が贖い主として来られ、痛みを覚えているすべての被造物に慰めと回復とをお与えになり、私たちをも罪から贖い出してくださることを信じます。同時に、すべての隠された悪は暴かれ、神の義だけが残さられる日であることも信じます。主がかつて世に来られてから 2000 年以上が経過しました。それでも信仰者は待ち続けます。この信仰を決して取りさらないでください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
愛するゆえに人類を創造し、同時に愛の応答を求め給う、父なる神の愛。
世の終わりの審き主／贖い主として、定めの日に再臨し給う、主イエス・キリストの恵み。
信仰の眼、救いを求める心をもって、御言葉の真理を掴み取らせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。